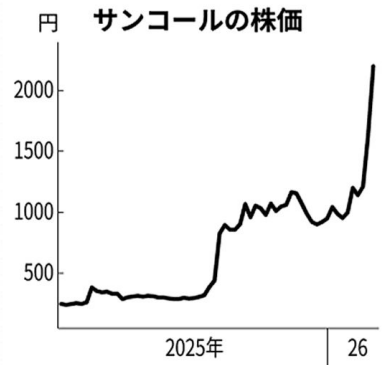
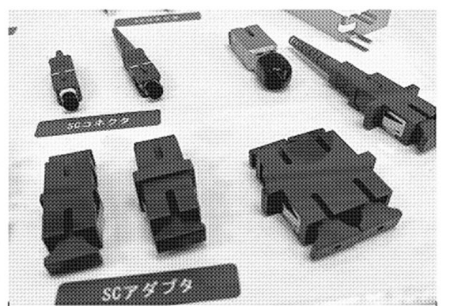


自動車部品のサンコーの株価が急上昇している。10～11日に4割上げ、上場来高値の2200円を付けた。2025年夏から半年余りで株価は5倍になった。主力の自動車向けバネ製品は車の電装化で苦戦しているが、データセンターに使う光通信コネクタが業績を押し上げている。

光通信部品 AI用に軸足



車部品のサンコー



サンコーの光通信コネクタなど電子部品

のコネクタを製造販売するライセンスを取得することを発表した。生成AI（人工知能）の普及でデータセンターの建設ラッシュが続く巨大市場開拓への期待が高まっている。25年11月、26年2月の修正したのがきっかけで顧客をまわって要望を丁寧に見込む。25年前半は200～400円ほどの水準で推移していたサンコーの株価が急上昇したのは8月。26年3月期の連結業績予想で、純利益を前年度から22億円積み増しすることを発表した。36億円（前期は7億6900万円の赤字）に上方修正したのがきっかけで急激に受注が増えている。向こう3～5年はこの傾向が続くと需要増で急激に受注が増えている。奈良正社長は「足元で急激に受注が増えている。向こう3～5年はこの傾向が続くと需要増で急激に受注が増えている。向こう3～5年はこの傾向が続くと需要増で急激に受注が増えている。」と見込んでいる。

データセンター向けを開拓

ほか、接続部分の根元ではなくケーブル線の部分を引く張るとコネクタを外せる仕様を取り入れ、細かい工夫で支持を集める。サンコーは1943年に創業。航空機用エンジンのバネ部品に使う金属材料の製造や加工を手がけてきた。50年代にはトヨタ自動車など大手国内自動車メーカーにバネ部品の納入を開始。バネに使う金属は耐久性が高いため、精密加工にも独自の技術が求められる。サンコーはその技術を生かし、80年代には当時金属製だった光ケーブル用の接続部品を開発した。現在は樹脂製の光通信コネクタも手がけている。26年3月期の連結業績予想をみると、売上高が前期比19%減の520億円、営業利益は95%増の67億円を見込む。光通信コネクタを含む「電子情報通信分野」の売上高は149億円を見込み、主力の「既存自動車分野」の半分以下だ。一方、電子情報通信の営業利益は50億円で、既存自動車の3倍を稼いでいる。構造改革も株高を支えている。24年に不採算のハードディスクドライブ（HDD）用サスペンションからの撤退を表明し、事業を縮小している。先行投資や技術開発などコスト負担が大きかった。24年3月期の同業の売上高は86億円で、営業損失は46億円の赤字だった。自動車部品では電気自動車（EV）向けにシフトする。28年3月期までの3カ年の中期経営計画で、成長投資としてEV部品と光通信コネクタに40億円を振り向ける方針だ。自己資本利益率（ROIC）は6・1%を目指す。東海東京インテリジェンス・ラボの金井健司氏は「既存自動車分野の半分以上は、自動車部品銘柄は既存の自動車領域で成長が見通しにくいなか、非自動車分野で業績を伸ばす企業が評価されている」と指摘する。サンコーの自己評価は慎重だ。トヨタ自動車出身の奈良社長は「収益改善には原材料高騰の価格転嫁なども寄与している。現場の生産性改善はこれからだ」と手綱を引き締める。「本当の実力を測る」ために、製品ごとの投下資本利益率（ROI）の導入も始めた。株高を一過性にしないために、筋肉質な事業基盤づくりを着実に進める。（平岡大輝）

|| おわり